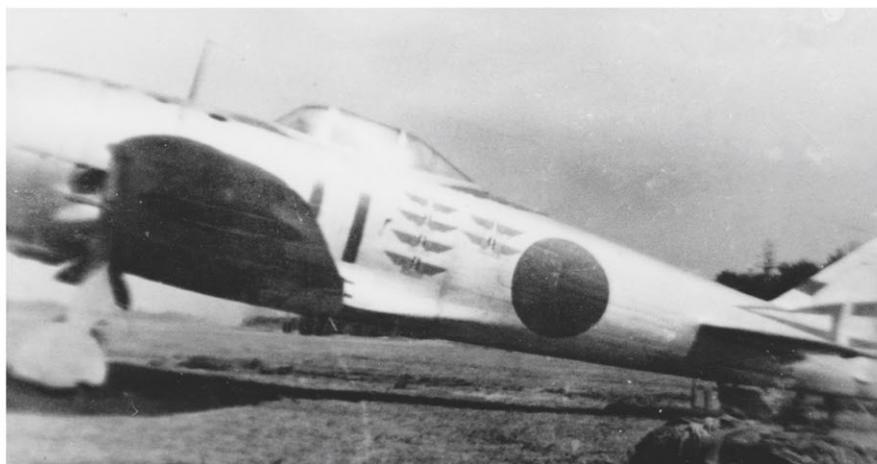
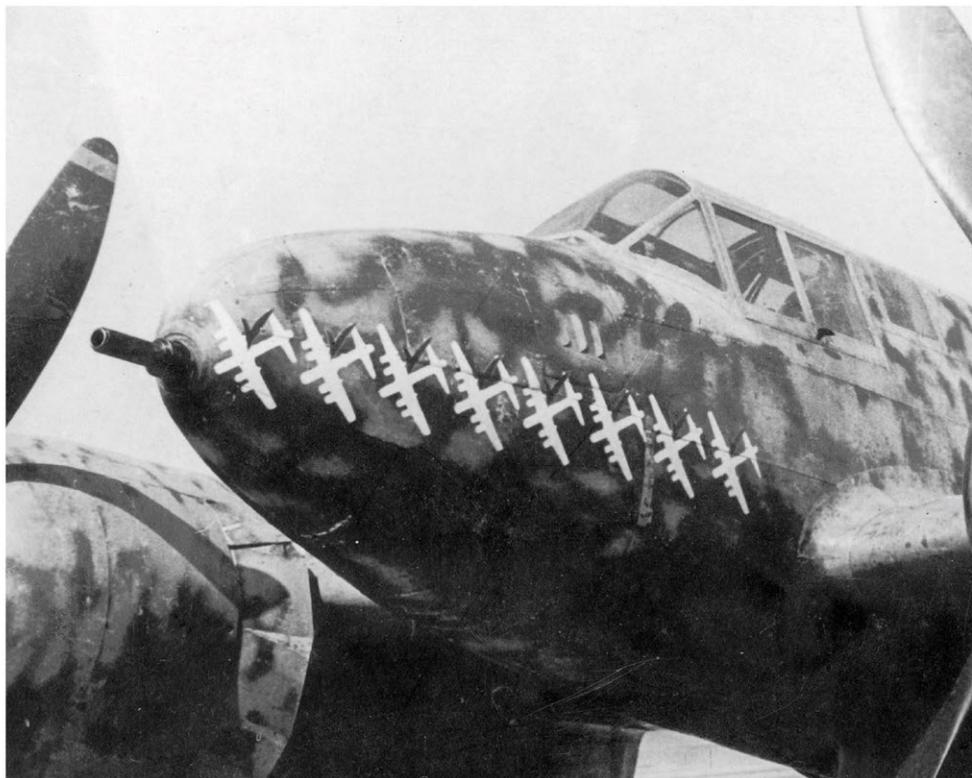


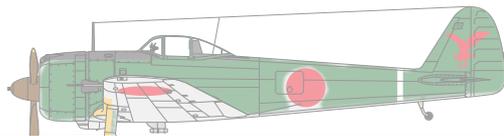
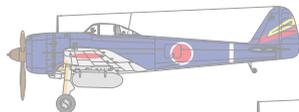
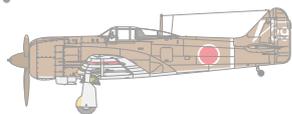
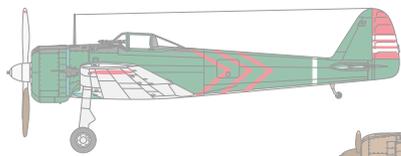
The Imperial Japanese Army Fighter Group 2

# 日本陸軍戦闘機隊2 エース列伝

秦 郁彦 / 伊沢保穂 共著



大日本絵画



# 日本陸軍戦闘機隊 2

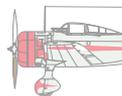
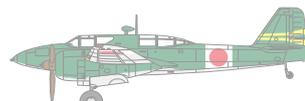
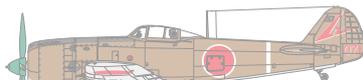
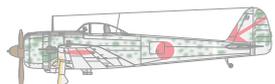
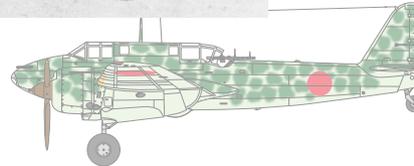
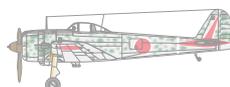
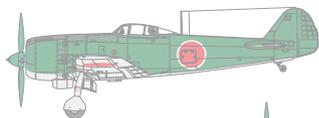
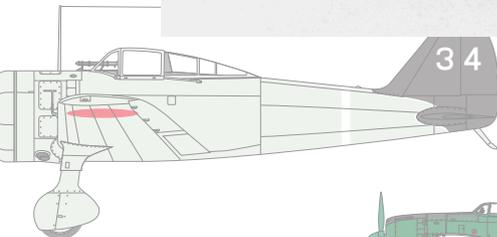
The Imperial Japanese Army Fighter Group 2

エース列伝



秦 郁彦 / 伊沢保穂 共著

大日本絵画



# 日本陸軍戦闘機 エース搭乗機の塗装とマーキング Painting Schemes and Markings of I.J.A. Fighter Group Aces

カラーイラスト／二宮茂樹 考証・解説／伊沢保雄 Color illustrations by SHIGEKI Ninomiya, text by YASUHO Izawa

1. 九七式戦闘機

飛行第11戦隊第1中隊 篠原弘道准尉機 昭和14年／ノモンハン



▲昭和14年5月に勃発したノモンハン事件において日本陸軍戦闘隊では空前絶後となる撃墜58機を記録した篠原准尉の搭乗機。垂直尾翼の戦隊マークは部隊名の11を図案化したもの。飛行第50戦隊が電光と称したのに対してこちらは稲妻と称した。飛行第11戦隊の第1中隊の戦隊マークは一般的な白である(第2中隊が赤、第3中隊が黄色という部隊が多い)。第1中隊では赤い星をモチーフとした撃墜マークを用いており、本機のほか、8個の撃墜マークを描いた中隊長の島田健二大尉機の写真も伝わっている(102ページ参照)。

2. 九七式戦闘機 飛行第59

戦隊第1中隊 梶出勇曹長機 昭和15年／漢口



▲本土防空戦でB-29撃墜王として有名となる梶出大尉が、まだ下士官候補者だった頃の飛行第59戦隊における搭乗機。胴体に大書された稲光がこの頃の飛行第59戦隊の戦隊マークで、第2中隊は赤(本部が緑、第1中隊が白といわれるが諸説ある)。方向舵にカタカナで記入された「カ」は梶出曹長の頭文字にちなんだ固有機識別記号で、イラストとは違い、ゴシック調の書体となっていた時期もあった。九七式戦闘機は全体を明灰色で塗装していたが、一式戦闘機以降の陸軍単発戦闘機は、しばらく無塗装銀が工場出荷時の定番となる。

3.一式戦闘機一型 飛行第64戦隊戦隊長 加藤建夫中佐機 昭和16年～17年5月/マレー・ビルマ



▲「加藤隼戦闘隊」の名で老若男女から親しまれた飛行第64戦隊の太平洋戦争開戦時の戦隊長である加藤中佐の搭乗機。矢印をモチーフとした戦隊マークは、モンハン事件後、しばらくしてから使われ始めたもので、この頃の戦隊本部機は青フチ付きの白という色味だった。操縦席後部の胴体に同じ配色の帯を巻いているほか、主翼にも帯状の帯を巻いて戦隊長標識としている（71ページ塗装図も参照）。プロペラスピナーも白。この頃の陸軍機はまだ胴体に日の丸を記入していなかった。

4.一式戦闘機一型 飛行第64戦隊第2中隊第3編隊長 中村三郎中尉機 昭和18年/ビルマ



▲飛行第64戦隊の若き編隊長、中村三郎中尉の搭乗機。矢印をモチーフとした戦隊マークは白フチ付きの赤で記入され、第2中隊の所属を表している。飛行第64戦隊では編隊長（海軍でいう3機編隊の小隊長）機の胴体に斜めの帯を記入しており、第1編隊長（中隊長）機は白、第2編隊長は赤、第3編隊長は黄色で記入した。この序列は中隊色の順序と同様である。胴体の日の丸は昭和17年4月18日のドゥーリットル空襲で、敵味方識別に躊躇があったために新たに規定されたもの。主翼前縁の黄褐色の敵味方標識も同様の理由である。

5. 一式戦闘機一型 飛行第50戦隊第3中隊 穴吹智軍曹機 昭和18年／ビルマ



▲少飛6期の戦中派戦闘機操縦者にして、旺盛な敢闘精神から「ビルマの桃太郎」と評された飛行第50戦隊の穴吹軍曹の搭乗機。方向舵から胴体主翼付け根へと貫く戦隊マークは電光と呼ばれ、飛行第50戦隊では第3中隊が白を使用（白は第1中隊という部隊の方が多い）。方向舵下部に記入された「吹雪」が穴吹機の固有機識別文字で、垂直安定板にはイギリス機の国籍標識を真似た撃墜マークが描かれている。陸軍機が胴体に日の丸を描くようになるのは昭和17年末からだが、飛行第50戦隊は開戦時の九七式戦闘機時代から記入していた。

6. 一式戦闘機二型 中期生産型 飛行第59戦隊戦隊附 南郷茂男大尉機 昭和18年／東部ニューギニア



▲飛行第64戦隊とともに太平洋戦争開戦時から一式戦一型を装備した飛行第59戦隊は、一式戦二型への機種変更も早かった。垂直尾翼の斜め帯が同戦隊のマークで、南郷機がこれを白フチ付きの赤としているのは第2中隊長時代の名残と思われる、胴体後方の戦地標識（白帯）の前に白フチ付き青（コバルト）の帯を2本巻き、戦隊本部附（のちの飛行隊長）を表している。スピナー前半分は白く塗装。この時期の主翼前縁の黄橙色の敵味方識別帯は陸海軍機ともに前後幅が広く、主翼カバーにかぶさるようになっていた。

7. 二式単座戦闘機二型丙 飛行第70戦隊第3中隊長 吉田好雄大尉機 昭和20年夏



▲本土防空戦において二式単戦を主用した飛行第70戦隊の中にあつて、若き中隊長として活躍した吉田好雄大尉の搭乗機。前面無塗装銀に反射除けの黒を塗った基本状態に戦隊マークを第3中隊を表す黄色で記入、垂直安定板の前縁の一部を赤く塗装している。操縦席脇に固有機識別用の数字を大書しているのが特徴で、連番の12の存在も確認されている。B29の文字と翼のマークを組み合わせた撃墜マークは秀逸なデザインであり、また日本陸海軍機においても他に類を見ない。本機は日の丸に白帯を巻いていないのも特筆する点だ。

8. 二式単座戦闘機二型丙 飛行第70戦隊第3中隊 小川誠少尉機 昭和20年夏



▲陸軍戦闘隊の多くを占めた下士官操縦学生出身の操縦者のひとりであつた小川准尉。開戦直前に飛行第70戦隊に配属されてから長らく実戦の機会を得なかつたが、本土上空でB-29を迎え撃つようになると老練な飛行技術は数々の撃墜戦果に結実。武功章を授与されるだけでなく、少尉に特進した。第3中隊の小川機はやはり戦隊マークを黄色で記入。胴体と主翼の日の丸には本土防空部隊を表す白帯が巻かれ、その後側には細い赤帯も付されていた。誇らしげに記入された撃墜マークは吉田大尉機と大きくデザインが異なっている。

# 目次

日本陸軍戦闘隊 エース搭乗機の塗装とマーキング ..... 2  
はじめに ..... 11

## 第 1 部 戦域ごとの陸軍戦闘隊のエース

◆通史編 1 日華事変とノモンハンのエース ..... 14  
◆通史編 2 太平洋戦争のエース ..... 18

## 第 2 部 エース列伝

※五十音順に掲載

◆あ行 ..... 34  
◆か行 ..... 65  
◆さ行 ..... 91  
◆た行 ..... 115  
◆な行 ..... 130  
◆は行 ..... 144  
◆ま行 ..... 155  
◆や行 ..... 162  
◆わ行 ..... 170  
◆エース一覧 ..... 176

## 巻末資料

◆陸軍戦闘隊の操縦者とその養成課程 ..... 181  
◆操縦学生 ..... 182  
◆航空士官学校 ..... 197  
◆陸軍少年飛行兵 ..... 197  
◆明野飛行学校甲種学生 ..... 204

協力者 ..... 206  
奥付 ..... 208

### ●日本陸海軍航空隊関係階級呼称一覧(大尉以下)

陸軍		海軍		
		昭和4年5月10日制定	昭和16年6月1日改正	昭和17年11月1日改正
大尉	士官	大尉/特務大尉/予備大尉	大尉/特務大尉/予備大尉	大尉
中尉		中尉/特務中尉/予備中尉	中尉/特務中尉/予備中尉	中尉
少尉		少尉/特務少尉/予備少尉	少尉/特務少尉/予備少尉	少尉
准尉(※1)	准士官	航空兵曹長(空曹長)	飛行兵曹長(飛曹長)	飛行兵曹長(飛曹長)
曹長	下士官	1等航空兵曹(1空曹)	1等飛行兵曹(1飛曹)	上等飛行兵曹(上飛曹)
軍曹		2等航空兵曹(2空曹)	2等飛行兵曹(2飛曹)	1等飛行兵曹(1飛曹)
伍長		3等航空兵曹(3空曹)	3等飛行兵曹(3飛曹)	2等飛行兵曹(2飛曹)
兵長(※2)	兵	1等航空兵(1空)	1等飛行兵(1飛)	飛行兵長(飛長)
1等兵		2等航空兵(2空)	2等飛行兵(2飛)	上等飛行兵(上飛)
2等兵		3等航空兵(3空)	3等飛行兵(3飛)	1等飛行兵(1飛)
3等兵		4等航空兵(4空)	4等飛行兵(4飛)	2等飛行兵(2飛)

※1：陸軍准尉は昭和7年に創設されたもので、それまでは「特務曹長」と称した。

※2：陸軍兵長は昭和15年に創設。それまでは古い上等兵のことを「伍長勤務上等兵」と呼んだ。

なお、陸軍では昭和15年までは「航空兵軍曹」「航空兵伍長」などと階級の前に兵科呼称をつけた。士官でも「航空兵大尉」などと呼んだ。陸軍の「航空兵曹長」と海軍の「航空兵曹長」は同じ字づらだが、陸軍は「航空兵・曹長」で切れ、下士官、海軍は「航空・兵曹長」で、准士官となっていた。



**青柳 豊 中尉**

少飛 1 期

**1st Lt. Yutaka AOYAGI**

大正6(1917)年、福岡県に生まれ、八女中学3年から陸軍飛行学校生徒(のちの陸軍少年飛行兵)第1期生に応募して合格。昭和10(1935)年11月、所沢陸軍飛行学校を卒業、続いて明野陸軍飛行学校で戦技教育を受け、ハルピンの飛行第

11聯隊に配属された。

昭和14(1939)年5月にノモンハン事件が起こるや、飛行第11戦隊(飛行第11聯隊が改称)第1中隊に属して出動、第1次、第2次ノモンハン戦を通じて10機を撃墜した。

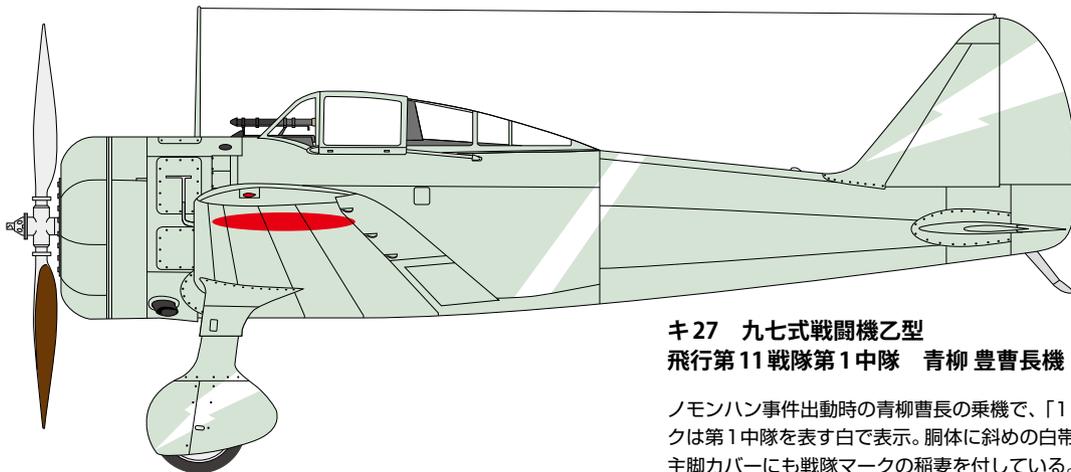
なかでも、7月25日の篠原弘道准尉救出劇は、青柳曹長の犠牲的精神を発露したものであった。すなわち、空戦で10機を葬ったのち、中隊長を中心に集合しつつあった島田中隊から、タンクに被弾した篠原准尉機が草原に不時着、そこへ10数台の敵戦車が接近してきた。これを見た青柳曹長は直ちに救出のため篠原機から70mの地点に着陸したが、戦車の射弾により被弾、離陸不能となり、青柳自身も腰に貫通銃創を受けて倒れてしまった。一方この時、落下傘降下した鹿島曹長を救出すべく着陸した岩瀬曹長機は、吉山曹長が先にこれを救出したので離陸していたが、篠原准尉と青柳曹長の危機を見て再び着陸、弾雨の中から2人を救出し、乗機の焼却を主張する青柳曹長を胴中に押し込んで離陸した(青柳機は上空の僚機が機銃掃射して炎上させた)。

陸軍病院に入院した青柳曹長は、停戦の前に回復して部隊へ復帰し、1~2度空戦に参加したと言われる。

昭和15(1940)年末、陸軍航空士官学校に少尉候補者第21期生として入校、翌年7月に卒業した青柳少尉は、太平洋戦争開戦にあたり南方作戦に参加する原隊(飛行第11戦隊)に復帰した。そして12月から翌年3月までマレー、スマトラ、ジャワ、ビルマの各戦線を編隊長として転戦しているが、2月16日、および25日にパレンバン上空で「プレニム」とハドソン爆撃機各1機を撃墜した以外に戦歴の詳細は判明しない。

昭和17(1942)年4月、新編の教導飛行第204戦隊附に転じたが、6月23日、戦技訓練中に僚機の誤射により墜落、殉職した。

温厚、快活な青年で抜群の射撃技術をもって知られた。総撃墜機数12機以上。



**キ27 九七式戦闘機乙型**

**飛行第11戦隊第1中隊 青柳 豊曹長機 昭和14年**

ノモンハン事件出動時の青柳曹長の乗機で、「11」を図案化した戦隊マークは第1中隊を表す白で表示。胴体に斜めの白帯1本を巻いているほか、主脚カバーにも戦隊マークの稲妻を付している。



## 浅野 等 大尉

操縦学生 49期

**Capt. Hitoshi ASANO**

明治44(1911)年、高知県に生まれ、海南中学を経て陸軍に入営、昭和9(1934)年8月、第49期操縦学生を卒業した戦闘機隊の古豪であった。

昭和14(1939)年5月にノモンハン事件が起こり、飛行第1戦隊第2中隊附として満蒙国境に出動した時は、28才、操縦歴5年を超えるベテランになっていた。

5月末の出動下令時、浅野准尉は飛行場設定のため南樺太の豊原に出張中であつたが、迎えに来た増加タンク付の九七戦で一気に岐阜へ飛び、6月2日に満州へ前進した。

初陣は27日のタムスク攻撃で、加藤戦隊長編隊の3番機として出撃した浅野准尉は、あわてて上昇してくる「イ-15」群を優位から次々に攻撃、単機よく8機を撃墜し、その後、停戦の日まで2ヶ月余にわたり、中隊の中核となって老練な技術を発揮して計22機撃墜のスコアを達成した。

この間、8月末に出撃した際には、エンジン故障で引き返す途中、国境近くの草原に不時着、蒙古人の馬を奪って帰還したこともあつた。

ノモンハン停戦後、ハルピンに復帰した浅野准尉は、12月に少尉候補者第20期生として陸軍航空士官学校に入校、翌年11月に卒業して少尉に任官し、大刀洗陸軍飛行学校の

教官に補された。

昭和16(1941)年12月、中尉に進級、飛行第4戦隊附に転じたが、翌年8月、芦屋で新編された第248戦隊附となり、教育主任として若年操縦者の錬成に当たった。

昭和18(1943)年10月、南東方面の戦局急迫により、ニューギニア進出を下令され、10月18日に戦隊全機が芦屋基地を出発、マニラ経由でウェワクに進出した。その後、11月6日のマザブ攻撃を手始めに6~7回出撃し、2回空戦したが、ノモンハン戦の時に比べて米空軍の威力は圧倒的で、戦果は得られなかった。

そして25日、浅野中尉は、哨戒飛行の帰途、アレキシス飛行場に着陸する途中で奇襲爆撃を受け、爆風で機とともにジャングルに吹き飛ばされ、左肩を骨折してマニラへ後送された。

その後、内地で加療し、回復後は明野陸軍飛行学校教官となって終戦を迎えた。



▲ノモンハン事件勃発時にはすでに5年の操縦歴があつた浅野准尉。その停戦後、少尉候補者学生、飛行第4戦隊を経て、新設された飛行第248戦隊に着任、ニューギニア戦線を戦った。



**芦田 正夫 准尉**

操縦学生67期

**W.O. Masao ASHIDA**

大正6(1917)年、千葉県に生まれ、昭和10(1935)年、現役志願兵として入営。

その後、戦闘機操縦者を志し、昭和12年6月、飛行第11聯隊を原隊として所沢陸軍飛行学校に入校、第67期操縦学生を修了し、ハルピンの飛行第11戦隊(昭和13年8月、飛行第11聯隊が改称)に配属された。

昭和14(1939)年5月、ノモンハン事件の勃発により、芦田曹長は第3中隊に属して満蒙国境に勇躍出動し、28日の空戦で初撃墜を飾った。その後、戦場は小康をえたので、原駐地に復帰したが、6月末に再び国境に出動、27日からの第2次航空撃滅戦に健闘した。

とくに7月23日の空戦では攻撃下令後、直ちに突進して2機を葬ったのち、新手の敵30機を発見、味方に信号したが、間に合わずと見るや、単機で突入して乱戦のすえに1機を撃墜する大胆ぶりを示した。

しかし、8月12日の第3次出動の際、芦田曹長の編隊は下方の敵9機と激闘となり、自身も奮戦のすえに1機を撃墜したが、敵の集中火を浴びて被弾、手近の敵機に体当たりしてハルハ河上空に散華した。

総撃墜数13機。



▶ 昭和14年8月、第1次ノモンハン事件の終了時における飛行第11戦隊の空中勤務者たち。左から藤田隆大尉、浦原大助曹長、東郷三郎准尉、古郡吾郎曹長、ふたりおいて花田富雄曹長、芦田正夫曹長、大塚善三郎軍曹、木村三郎曹長といった強者たちの顔が見える。



## 穴吹 智 曹長

少飛6期

Sgt. Maj. Satoshi ANABUKI

『ビルマの桃太郎』と称され、陸軍少年飛行兵の華として勇名を知られた太平洋戦争のトップエースである。

大正10(1921)年、香川県の農家に生まれ、高等小学校卒業後、陸軍飛行学校生徒(のちの陸軍少年飛行兵)を志願して合格。

昭和13(1938)年4月、東京陸軍航空学校に入校、熊谷陸軍飛行学校で操縦を、大刀洗陸軍飛行学校で戦闘機戦技教育を受け、昭和16(1941)年3月、第6期生として全課程を終わり、7月に台湾の飛行第50戦隊第3中隊に配属された。10月に伍長へ進級し、12月8日の太平洋戦争開戦の日を迎えたが、時に19才の若桜であった。

開戦とともに金丸少尉の列機として比島航空戦に参加した穴吹伍長は、早くも12月21日にリングエン湾上空で「P-40」1機を撃墜して初戦果をあげた。その後、本隊がビルマへ転戦したのちも第3中隊は比島に残ってパターン作戦終了まで制空作戦に当たり、昭和17(1942)年2月9日にはリマイ上空で、残存していたP-40群と空戦して2機を撃墜した。

昭和17年4月、機種改変のため本土に帰還。6月に一式戦一型「吹雪」号を受領して戦隊主力とともにビルマに帰り、9月にミンガラドンへ展開、10月25日のテンスキア攻撃を皮

切りに、約1年にわたり熾烈な航空戦を続行した。

その出撃回数は173回に及び、撃墜数は公認で30機(うち不確実5)、非公認で48機(日記による)に達した。性格は温和であったが、内に烈々たる闘魂を秘め、黒江大尉は穴吹の戦闘を「勇敢かつ執拗である上に実に正確」と評し、上方からの急降一撃を特技とした。

なかでも昭和17年12月24日のマグエ上空戦では、離陸直前の爆撃で脚部に被弾、脚が引き込まない状態の機体で果敢に空戦して「ハリケーン」3機を撃墜、うち1機はイラワジ河中州に発火不時着させて、操縦者の少佐を捕虜とした。また、昭和18年1月26日には、ラングーンに襲撃した難攻不落の「B-24」を仕留め、ビルマにおける初撃墜を記録し、全戦闘隊の士気を高めた。

10月8日、穴吹軍曹はバセイン上空で単機「B-24」と「P-38」の編隊に突入、空戦中被弾、負傷したにもかかわらず、「P-38」2機、「B-24」2機を撃墜したのち、他の「B-24」の右方向舵に体当たりして海岸に不時着、3日目に救出され生還した。この驚異的な勇戦に対し、10日付けで異例の生存者個人感状が3航軍司令官より授与され、上聞に達した。また河辺ビルマ方面軍司令官は漢詩を贈り、オン・サン・ビルマ軍司令官は親しくその病床を見舞った。

その後、負傷完治を待たずに病院を抜けて帰隊したが、出撃を禁止された。

昭和19年2月、本土帰還を命じられた穴吹軍曹(10月に曹長に進級)は、その後、終戦まで明野陸軍飛行学校の助教として教育に当たったが、この間にも比島へ四式戦闘機の空輸に飛んで、「F6F」と空戦したほか、本土防空戦にも出動し、6機撃墜のスコアを加えた。

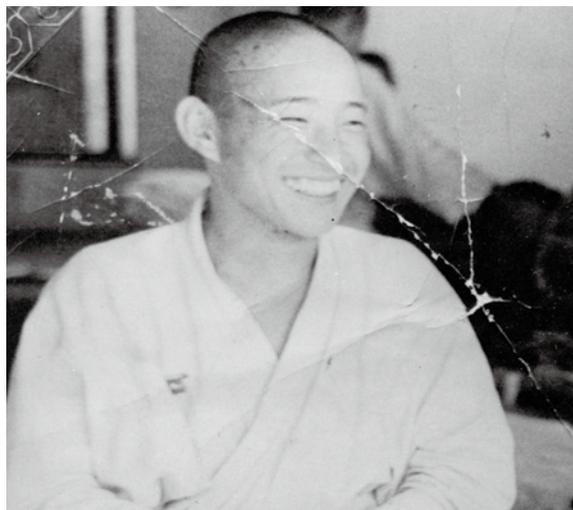
戦後は陸上自衛隊に入ってヘリコプタ隊に属し、3等陸佐で退官した。



▲明野陸軍飛行学校において一式戦闘機二型の操縦席に収まった穴吹曹長。温和な性格であったが、内に烈々たる闘魂を秘め、「ビルマの桃太郎」との異名をとった。

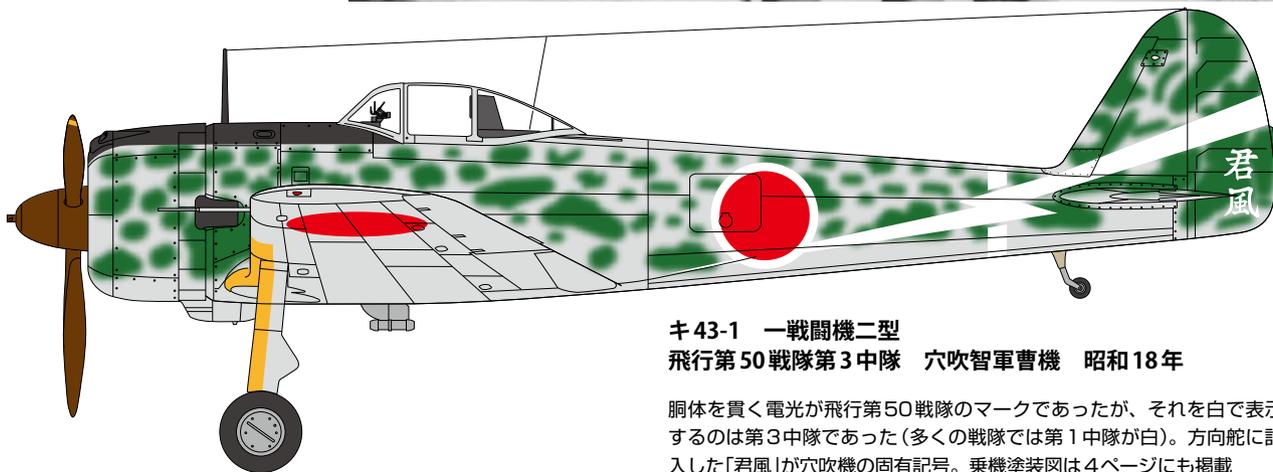


◀ 週番下士官のタスキをかけた穴吹軍曹。



▶ ビルマ航空戦における負傷により内地に送還され、療養中の穴吹軍曹。内地ということで、表情もにわかに綻んでいる

▶ こちらは前ページ写真と同様、ビルマでの負傷から復帰し、明野陸軍飛行学校へ助教として勤務していた頃の穴吹曹長。第1線を離れたとはいえ、フィリピン決戦の際には四式戦闘機の空輸に飛んで「F6F」と空戦、また本土防空戦にも参加して、終戦までに6機撃墜を記録に加えることとなった。



キ43-1 一戦闘機二型  
飛行第50戦隊第3中隊 穴吹智軍曹機 昭和18年

胴体を貫く電光が飛行第50戦隊のマークであったが、それを白で表示するのは第3中隊であった(多くの戦隊では第1中隊が白)。方向舵に記入した「君風」が穴吹機の固有記号。乗機塗装図は4ページにも掲載



## 安間 克巳 少佐

陸士48期

Maj. Katsumi ANMA

大正3(1914)年、静岡県に歯科医を父として生まれ、愛知一中を経て、昭和7(1932)年4月に陸軍士官学校予科に入校、昭和11(1936)年6月に陸軍士官学校第48期本科を卒業し、10月に航空兵少尉に任官した。

昭和13(1938)年春、飛行第2大隊の加藤中隊に配属されると、5月20日の蘭封上空の初陣で、沢田大尉の3番機として乱戦のうちに「イ-15」1機を撃墜した。

昭和14(1939)年7月末、華南にあった飛行第64戦隊にノモンハン戦への出動が下令されると戦隊は全力をもって移動を開始し、8月15日に第1線近くのホシウ飛行場に展開した。安間中尉は第1中隊第3編隊長として勇躍参戦、20日のハルハ河上空の空戦で編隊撃墜8機をあげたのを皮切りに、翌月15日の停戦の日まで連日のような激戦に健闘。

1ヶ月足らずの間に出勤40回、空戦10数回を記録し、5機(うち不確実2機)を撃墜した。しかし、中隊も老練者3名を失い、安間機も累計20発の被弾を重ね、とくに8月21日の空戦で

は、1機撃墜後に11発被弾し、半壊状態の機を操ってようやく帰投した。

昭和15年1月から半年、明野陸軍飛行学校の甲種学生となり、恩賜の成績で卒業して帰隊。8月には大尉へ昇進して第3中隊長となった。

以後、戦死するまでの2年近くの間、前任中隊長として戦隊団結の中心となり、とくに昭和16年に加藤建夫少佐が飛行第64戦隊の戦隊長に着任してからは、無二の補佐役として絶大な信頼を受け、形影治うような存在であった。

太平洋戦争開始とともに、マレー、スマトラ、ジャワ、ビルマを転戦、第1、2中隊の損耗が大きかった一方、第3中隊はほとんど無傷で戦果も最大であった。

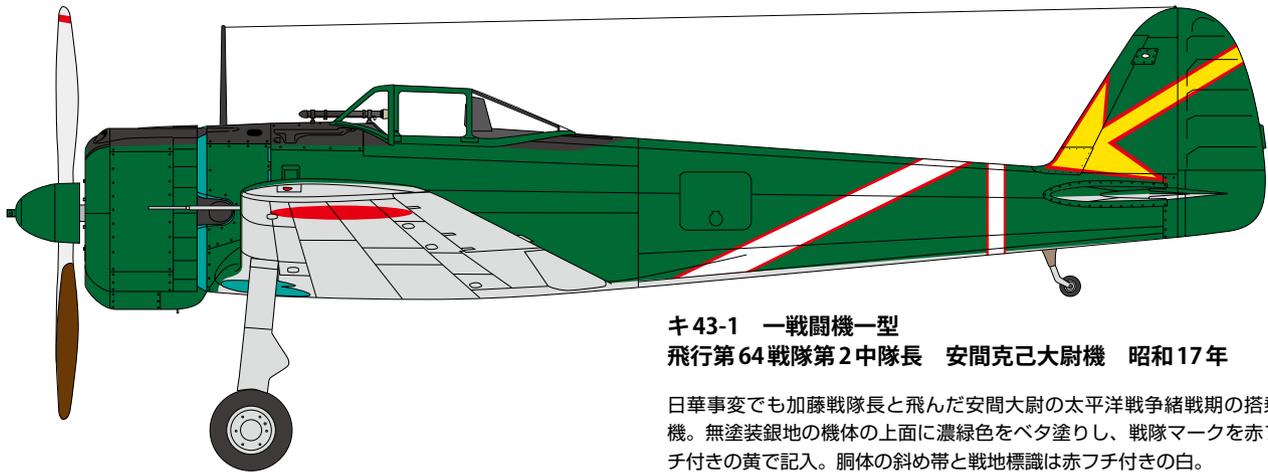
昭和17年4月8日、安間大尉は加藤戦隊長とともに、初陣者をまじえて雲南省のローウィン飛行場攻撃に出動した。高度4,000mで進入し、敵を求めたが発見できなかったので対地攻撃に移り、在地の3機を炎上させたのち上昇に移ったところ、山かげに待ち伏せしていた米義勇空軍の「トマホーク」20数機の奇襲を受け、安間大尉をふくむ4機が行方不明となり、帰還した機もほとんど全機が被弾していた。

片腕と頼んだ安間大尉を失った剛毅の加藤戦隊長は、帰還後も無言で飛行場に立ちつくしたと伝えられるが、1ヶ月後にそのあとを追った。

総撃墜機数12機。



▲胴体に太い長機標識を巻いた九七式戦闘機(31)を背にした安間中尉。ノモンハン戦参加の経験を持ち、飛行第64戦隊では加藤戦隊長が片腕とも頼んだ人物であった。



キ43-1 一戦闘機一型  
飛行第64戦隊第2中隊長 安間克己大尉機 昭和17年

日華事変でも加藤戦隊長と飛んだ安間大尉の太平洋戦争緒戦期の搭乗機。無塗装銀地の機体の上面に濃緑色をベタ塗りし、戦隊マークを赤フチ付きの黄で記入。胴体の斜め帯と戦地標識は赤フチ付きの白。

※飛行第64戦隊は胴体の斜め帯で編隊長(海軍でいう小隊長)搭乗機を表し、第1編隊長：白、第2編隊長：赤、第3編隊長：黄となっていた。この序列は中隊色と同じであった。第1編隊長は中隊長ということ。



**五十嵐 留作** 曹長  
操縦学生89期

Sgt. Maj. Tomesaku IGARASHI

大正9(1920)年、新潟県に生まれ、昭和14(1939)年、現役志願兵として満州の独立守備隊に入営、ついで華北戦線に参戦した。

昭和16年に航空兵に転じ、昭和17年11月に操縦学生第89期を卒業。昭和18年12月に飛行第50戦隊に配属された、文字どおりの戦中派パイロットである。

若年ながら永島清隆中尉の僚機として持ち前の闘志によっていち早く、飛行第50戦隊後半期の随一のエースに成長した。

空戦場に登場したのは昭和18年末のビルマ航空戦であったが、昭和19年に入って永島中尉編隊に属し、インパールを中心に各地への進攻、フーコン溪谷上の辻斬り、防空迎撃戦等で活躍。1月から、戦死する6月までの短期間に、戦闘機16機(うち不確実4機)、「DC-3」3機を葬り(昭和19年7月31日付け朝日新聞)、とくに「P-38」を好餌としたため、「P-38撃墜王」と称された。

なかでも6月6日、五十嵐軍曹は、メイクテラに来襲した「P-38」2機を単機でアラカン山系上空まで執拗に追撃、1機を撃墜したのち、弾丸が尽きるや、他の1機に肉薄、プロペラで相手機の方向舵をかじりとった。

その後も空挺攻撃等に健闘していたが、6月17日、小隊長としてインパール平野を制空中、敵双発1機を協同で撃墜したのち、20数機の「スピットファイア」に優位から攻撃され、ビシエンブル上空で被弾するや、敵陣地に自爆した。

その戦功に対し、田副第5飛行師団長から「旺盛なる攻撃精神特に豪胆不屈烈々たる闘志と研鑽精到を極める戦技」を賞して、とくに6月17日付で賞詞が授けられている。



**石井 武夫** 准尉

操縦学生 60期

**W.O. Takeo ISHII**

愛知県の出身。現役兵として陸軍に入営したのち、航空兵となり、昭和11(1936)年8月、飛行第1聯隊から第60期操縦学生として所沢陸軍飛行学校に入校、翌年1月末に熊谷陸軍飛行学校を卒業し、明野陸軍飛行学校での戦闘機戦技教育を経て、飛行第1聯隊に復帰し、第1中隊に配属された。

昭和14年5月にノモンハン事件が起こった時は、飛行時間1,000時間前後の中堅操縦者となっていた。

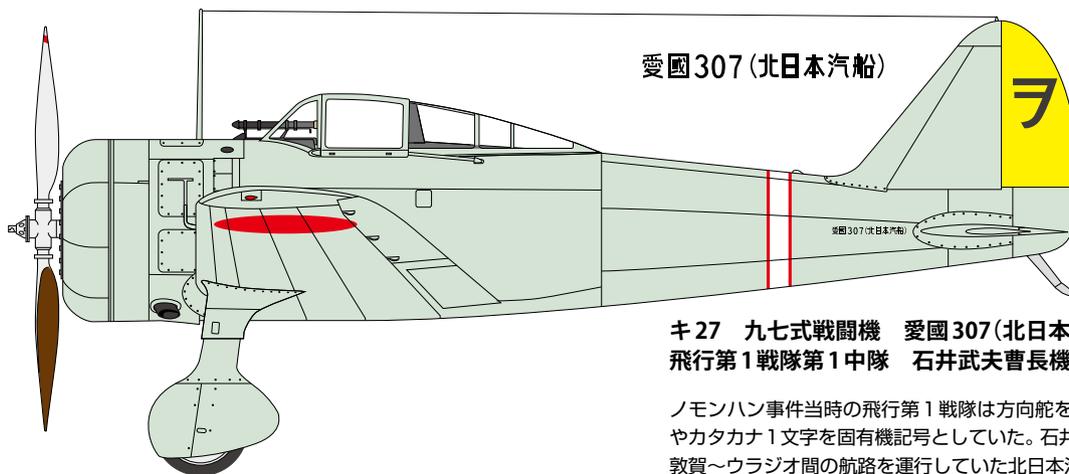
ノモンハン事件への動員が決まった飛行第1戦隊(飛行第1聯隊から編成)主力は6月上旬に各務ヶ原から満州に前進したが、石井曹長は約1ヶ月遅れて、新たに受領した九七式戦闘機「愛國307 北日本汽船」号を駆ってこれを追求した。

初陣で3機を撃墜したのち、連日の空戦に出動して戦果を重ね、8月21日に負傷して後退するまでの1ヶ月余で計18機を葬った。

8月21日のタムスク攻撃では、安原中尉編隊の3番機として爆撃隊を援護して進攻途上、「イ-15」及び「イ-16」50数機と交戦し、1時間近くにわたる空戦で左腕貫通と右腰盲貫銃創を受け、機体にも約60発被弾したが屈せず、空戦を続行したのち離脱して基地に帰還した。

この負傷によりハイラル、ついで旅順病院へ後送されて入院したが回復は進まず、入院生活は2年以上に及んだ。

その後、熊谷陸軍飛行学校、大刀洗陸軍飛行学校で教育にあたり、特攻隊教員として終戦を迎えた。



キ27 九七式戦闘機 愛國307(北日本汽船)  
飛行第1戦隊第1中隊 石井武夫曹長機 昭和14年

ノモンハン事件当時の飛行第1戦隊は方向舵を中隊色で塗り、ひらがなやカタカナ1文字を固有機記号としていた。石井曹長の愛機は愛國号で、敦賀〜ウラジオ間の航路を運行していた北日本汽船の献金によるもの。



## 石沢 幸次 准尉

操縦学生67期

W.O. Koji ISHIZAWA

大正3(1914)年、長野県に生まれ、昭和10(1935)年1月、現役兵として飛行第1連隊に入営、昭和12年6月に第67期操縦学生として所沢陸軍飛行学校に入校。ついで明野飛行学校で戦闘機戦技教育を受け、昭和13年5月に帰隊、飛行第1戦隊(昭和13年7月、飛行第1聯隊から編成)の第2中隊に配属されたが、7月には新編の24戦隊に転属した。

昭和14年5月にノモンハン事件が発生すると、石沢曹長は第2中隊に属して勇躍満蒙国境に出動。初陣は6月22日の空戦で、古川中尉編隊の3番機として奮戦して2機を撃墜した。この日、僚機の大多数は苦戦し、被弾しなかったのは齋藤千代治曹長機と石沢機のみであった。

ついで7月4日夕方、田代中隊は「SB」および「イ-16」の編隊とボイル湖上空で空戦、石沢曹長は2機を撃墜したのち被弾し、頭部および右足に重傷を負ったものの、かろうじて生還した。その後、2週間の入院で戦場に復帰し、停戦の日まで健闘。その戦果は撃墜計11機に達した。

太平洋戦争では、開戦とともに比島航空作戦に参加したのち、満州のハイラルに復帰したが、昭和17年7月、第2次および第3次セ号作戦に参加するため広東に転進、パレンバンを経て、昭和18年5月にはさらにニューギニアへ前進。ブーツおよびウェワク飛行場を根拠に、東部ニューギニア航空戦に活躍し、10月内地に帰還した。

昭和19年2月に台湾の第20教育飛行隊に転じ、昭和20年1月には飛行第105戦隊附となり、その所属で終戦を迎えた。

太平洋戦争における戦果は不明である。



▶ノモンハン事件に出動した飛行第24戦隊の九七式戦闘機。漢数字の「二四」を図案化した戦隊マークを垂直尾翼に記入している。石沢曹長は同戦隊の第2中隊に属して戦った。



## 石塚 徳康 准尉

少飛3期

W.O. Tokuyasu ISHIZUKA

ノモンハンの「敵中帰還」で知られた少年飛行兵出身の名手である。

東京の出身で、昭和10(1935)年2月、陸軍飛行学校生徒第3期生に合格して熊谷陸軍飛行学校に入校、さらに明野陸軍飛行学校で戦闘機操縦教育を受け、昭和13年2月、卒業と同時に飛行第11戦隊に配属された。

昭和14年6月、第2次ノモンハン事件が勃発すると、第2中隊花田編隊に属し、勇躍して満蒙国境に出動した。

戦隊随一の内気と言われていたが、空戦時には見違えるほどの闘魂を示し、ノモンハン戦の全期を通じて撃墜されること2回、不時着1回を経験したがひるまず、計12機を撃墜し、少飛3期の華とうたわれた。

なかでも8月5日には、川又上空で「イ-16」1機を撃墜したのち、石塚軍曹は危地に陥った僚機の救援に赴き、空戦中、横から操縦を誤った別の「イ-16」と空中衝突し、空中に放り出されたが、接地寸前に開傘着陸した。しかし、そこはハルハ河西岸の外蒙内で、石塚軍曹は炎熱の草原に身を潜め、絶食のまま昼夜を問わずハルハ河をめざして歩きつづけ、時に敵戦車やソ連兵の群中にまぎれつつ、河を泳ぎわたり、9日朝、倒れているところを味方地上部隊の斥候に発見され、生

還した。そして、10日ほど休養したのち、再び空戦場に復帰した。

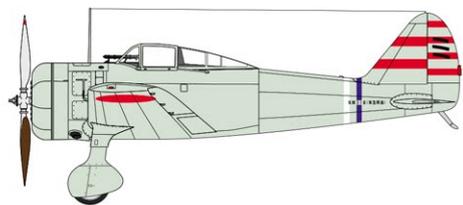
太平洋戦争では、同じく飛行第11戦隊に所属してマレー、スマトラを転戦した石塚曹長は、昭和16年12月9日、ペナン進攻時に被弾してジャングル中に不時着し、このたびは土民に助けられ、1週間後、象に乗って生還した。

その後、ジャワ攻略終了までに2機撃墜を加えたが、病気で本土へ帰還。ノモンハン戦での衝突時の衝撃で視力が衰えたこともあり、教育部隊に移った。終戦前、2~3回、浜松から二式複戦で「B29を」邀撃して1機を撃墜したが、自身も2度撃墜されて不時着の記録を更新し、終戦を狭山で迎えた。

総撃墜数14機。



▲ノモンハン事件で敵機と空中衝突、落下傘降下し、徒歩で敵中を突破して味方地上部隊にたどり着き、救助されたエピソードを持つ石塚准尉。太平洋戦争中は飛行第11戦隊でジャワ攻略に参加した。



ISBN978-4-499-23403-0

C0076 ¥5400E



9784499234030

定価 (本体 5,400 円+税)



1920076054006

